

5 は種から発芽までの水管理の実際

POINT 1 出芽までの管理

- (1) 岩見沢地域のは種適期は乾籾播種法では、5月6日～12日です。
- (2) は種後は暖かい日を選び、一度入水（灌水）します。
- (3) 2回目の入水は、一度土壌表面が白くなり乾燥してからです。
- (4) は種後に鳩胸となった以降は、24時間以上水を停滞させてはいけません。停滞水は酸素不足を招き、出芽途中の種子を死滅させます。



初入水は暖かい日を狙って行う。は種床が極乾燥状態でも、土壌水分は20%前後はある。鎮圧がしっかりできていれば、は種直後の乾籾が乾燥で死滅することはない。



ほ場全体に水を張ろうとすると、過剰入水となり水の停滞を招く恐れがある。少し丘のところがあっても、入水を止める。ほ場の7～8割程度水がのる程度で良い。



初入水後のベストなほ場状態。乾粘に給水が進む。



鳩胸から出芽までは、このように乾いた状態が良い。種子が酸素を十分に取り込み、良好な発芽が得られる。

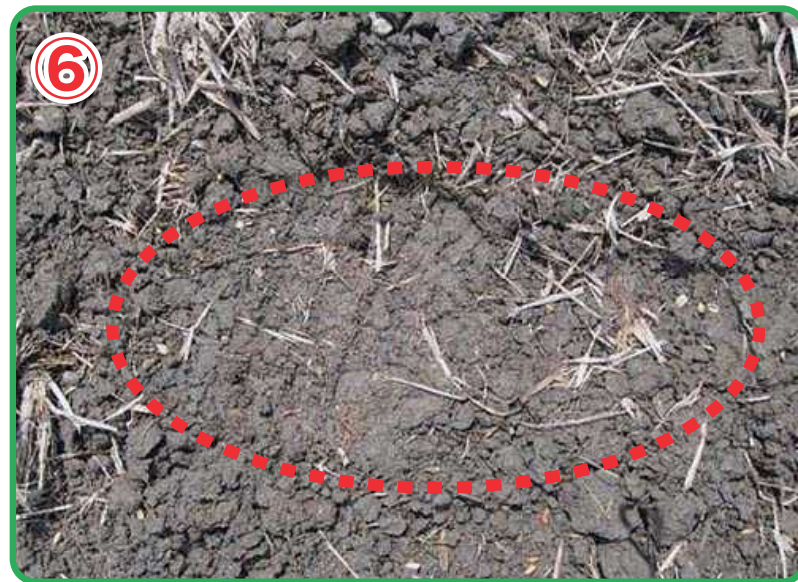
通水以降、5～6月上旬の用水は、水温が低いです。水温の上昇が得られる晴天の日や気温の上昇が期待できる日に入水することとします。種子は乾燥に強いですが、水分過多では腐敗しやすいので注意しましょう！



は種後は朝夕に巡回し、土壌の保湿、地温の把握に努めましょう。雨は酸素を含み、「恵みの雨」とされますが、停滞水となれば、酸欠の原因となります。降雨量の多いときは、排水対策を実行して、24時間以上の停滞水は避けましょう。

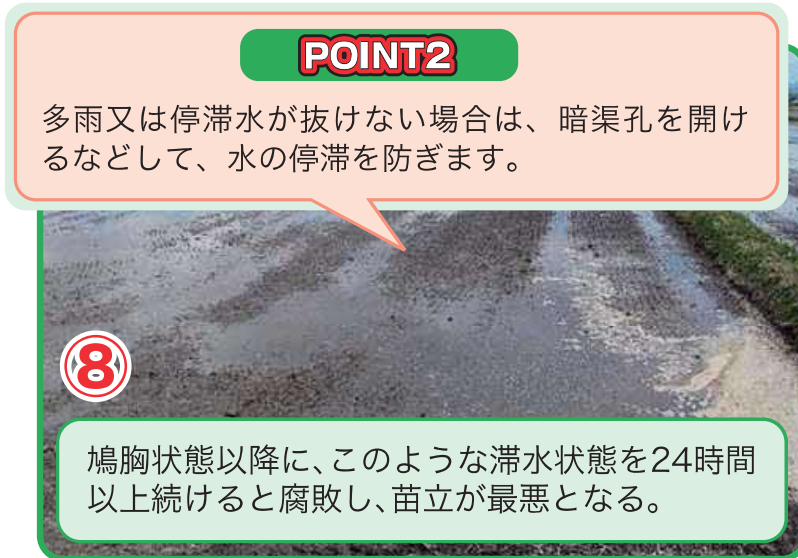


鳩胸から出芽までは、適度な降雨があり、晴天のときは短靴で歩き、靴底に泥が粘り付かない状態が、良い苗立ちにつながる。



POINT1

枕地は水が停滞しやすい。移植田が隣接しているときも同様。溝切りで停滞水の除去に努めましょう。



POINT2

多雨又は停滞水が抜けない場合は、暗渠孔を開けるなどして、水の停滞を防ぎます。

鳩胸状態以降に、このような滞水状態を24時間以上続けると腐敗し、苗立ちが最悪となる。

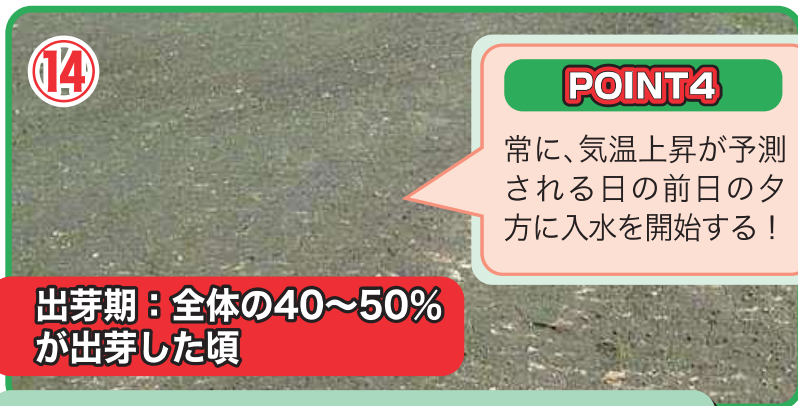


9

POINT3

2回目の入水は、一度ほ場の表面を乾かしてから行います。

ほ場の隅々まで水を行き渡らせようとすると、水が過剰に入りがちです。水田の8割程度に水が乗ったら、入水を止めることが水管理のコツです。



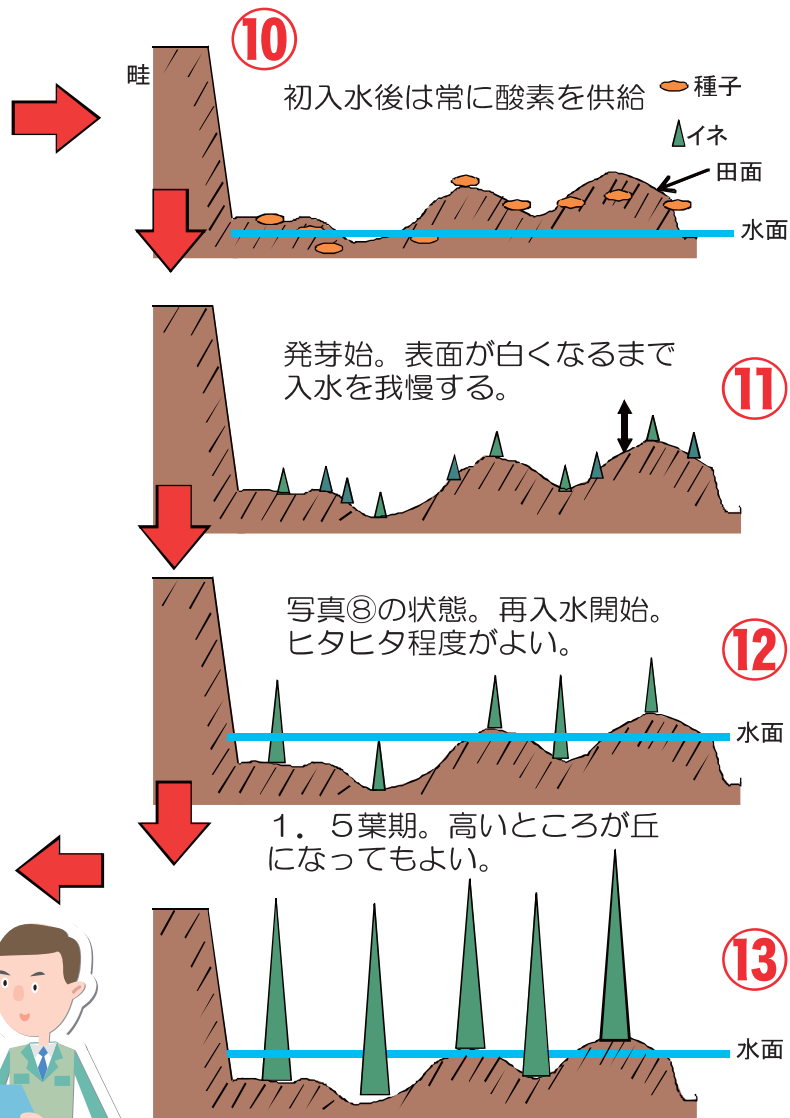
14

POINT4

常に、気温上昇が予測される日の前日の夕方に入水を開始する！

**出芽期：全体の40~50%
が出芽した頃**

乾田直播の乾籾播種法の場合のH20~24年の5年間の苗立率の全体平均は50%弱。良い人は65%程度。このことから種した種子の半分は、死滅すると考えた方が良いでしょう。



POINT 2 出芽状態の把握



POINT1

このような状態となったら
50cm四方の苗立を把握し、
肥培管理に役立てる。



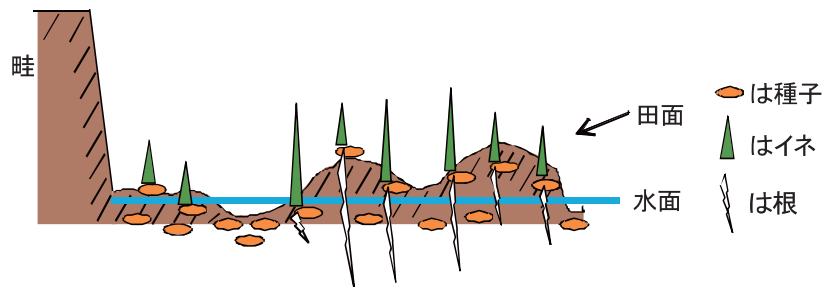
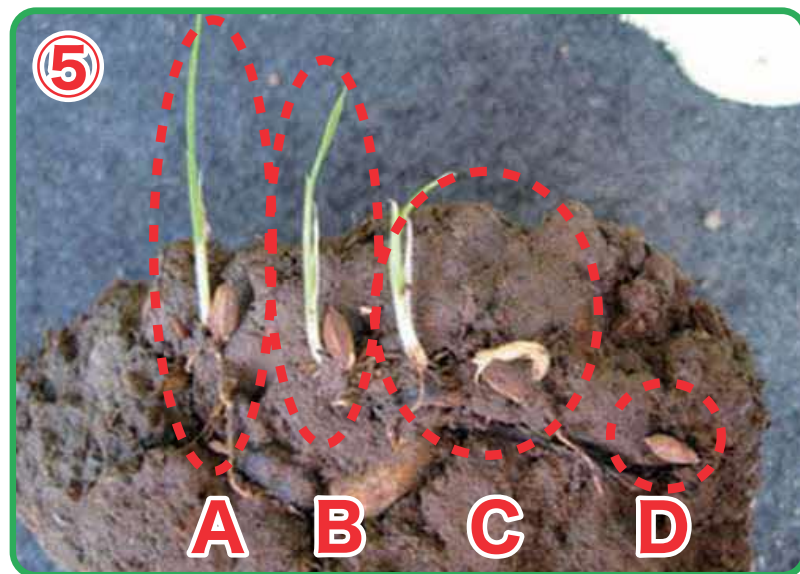
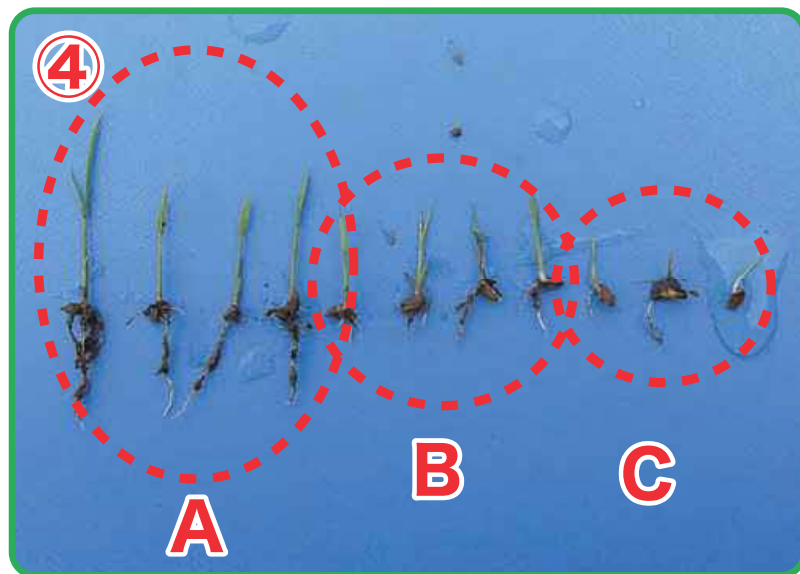
POINT2

出芽始には、必ず掘り上げて、
根の状態と土壤水分を確認
する。



POINT3

発芽始～1.5葉期までの深水
や停滞水は、芽を死滅させ
ます。すべてのほ場をよく
観察し、出芽と生育状況を
把握する。



- A : 健全な発芽と根の伸長
 B : 健全な発芽はしたが、根の伸長が不十分
 C : 発芽不良
 ○は種深度が深い ○均平不十分で水が停滞
 D : 種子腐敗
 ○は種深度が深い ○均平不十分で水が停滞

は種深度が深くなると、発芽不良や種子腐敗の原因となります。播種機の調整を行い、深まきとまらないように注意します。



土づくりを励行し、良く乾く水田を目指しましょう！碎土性も向上し、は種深度が一定に保てます。

ほ場均平も重要な技術です。均平作業には、作物の残渣物や土壤水分が高いほ場は、作業の妨げとなります。